

やきものの始まり

土器の誕生と展開

■ 指定記号の◎は重要文化財を示しています。

番号	指定	名 称	窯	摘 要	時 代	法 量（cm）
1		縄 文 大 壺		加曾利E式	縄文中期	高76.0 口径57.5
2		土 偶 胸 部			縄文後期	高10.3 幅 9.0
3		土 偶 坐 像		青森県出土	縄文後期一晩期	高12.2
4		弥 生 壺			弥生	高24.8 胴径21.8
5		土 師 器 大 壺		「備中国小嶋郡桂島出土」の墨書あり	古墳	高69.0 胴径51.2
6	◎	埴 輪 鷹 狩 男 子 像		群馬県出土	古墳	高76.0
7	◎	埴 輪 男 子 立 像		茨城県出土	古墳	高122.0

古代のやきもの

須恵器・施釉陶の誕生と展開

8		須 恵 器 甕			古墳一飛鳥	高17.0 口径12.7
9		須 恵 器 提 瓶			古墳	高36.8 幅28.2
10		須 恵 器 長 頸 壺		「岡山県邑久郡長浜村字寒風出土」の添状あり	奈良	高40.5 胴径26.2
11		風 字 瓦 硯			奈良	高4.2×18.5×13.2
12		二 彩 碗			奈良	高 3.8 径14.0
13		山 茶 碗		伝猿投山窯址出土	平安一鎌倉	高 5.6 径15.8

中世のやきもの

焼締陶と施釉陶の隆盛

14		灰 釉 壺	常滑		鎌倉	高46.9 胴径39.7
15		灰 釉 壺	丹波		鎌倉	高49.0 胴径43.8
16		灰 釉 壺	伊賀		鎌倉	高25.1 胴径23.4
17		檜 垣 彫 文 壺	信楽		室町	高34.4 胴径28.5
18		灰 釉 大 壺	越前		室町一桃山	高57.2 胴径51.8
19		灰釉印花巴文瓶子	瀬戸		鎌倉	高25.7 胴径17.2
20		鉄釉流掛大徳利	瀬戸		室町	高30.6 胴径21.9
21		白 天 目 茶 碗	瀬戸		室町	高 6.8 径12.6

近世のやきもの①

茶陶の隆盛

22		四 耳 葉 茶 壺	備前		桃山	高40.5 胴径40.0
23		捻 輪 形 水 指	丹波		江戸前期	高14.8 径17.8
24		黒 楽 茶 碗	京都		桃山一江戸	高 7.9 径10.0
25		志 野 柳 文 鉢	美濃		桃山	高 6.0 径15.5
26		志 野 盃	美濃		桃山	高 3.7 径 5.5
27		志 野 四 方 盃	美濃		桃山	高 5.6 幅 6.4
28		志 野 香 合	美濃		桃山	高 4.0 径 6.4
29		織 部 六 角 盃	美濃		桃山	高 5.8 径 6.6
30		織 部 梅 文 香 合	美濃		桃山	高 5.6 径 7.0
31		織 部 香 合	美濃		桃山	高 3.4 径 6.2
32		黒 織 部 沓 茶 碗	美濃		桃山	高 8.2 径14.8
33		赤 織 部 沓 茶 碗	美濃		桃山	高 6.7 径13.5
34		赤 織 部 瓜 文 角 皿	美濃		桃山	高 6.3 幅22.6
35		織 部 桐 文 皿	美濃	5 点	桃山一江戸	(各)高4.0 径16.0
36		粉 引 徳 利 萩			江戸前期	高15.0 胴径14.6
37		粉 引 盃 萩			江戸前期	高 2.9 径 6.6
38		斑 灰 釉 壺	唐津(帆柱)		桃山	高11.7 径15.7
39		奥 高 麗 茶 碗	唐津か	上野焼とする説あり	江戸前期	高 9.5 径16.0
40		鉄 絵 盃	唐津		江戸前期	高 6.7 径 7.3
41		灰 釉 流 掛 茶 碗	高取(山田)	寛永元年～7 年作	江戸前期	高 8.2 径12.9
42		流 釉 水 指	高取(小石原)		江戸中期	高15.4 径15.7

近世のやきもの②

磁器の誕生と展開

番号	指定	名 称	窯	摘 要	時 代	法 量（cm）
43		染 付 草 花 文 大 皿	有田(伊万里)		江戸前期	高10.8 径45.4
44		染 付 唐 草 文 水 指	有田(伊万里)		江戸前期	高17.2 口径11.2
45		染 付 草 花 文 徳 利	有田(伊万里)		江戸前期	高22.0 径10.8
46		染 付 松 文 徳 利	有田(伊万里)		江戸前期	高21.0 径10.4
47		染 付 草 花 文 芥 子 入	有田(伊万里)		江戸中期	高11.5 全幅10.2
48		染 付 網 文 大 皿	有田(伊万里)	3 点のうち(中・小)	江戸後期	(中)高5.5 径41.0 (小)高4.8 径34.0
49		色 絵 鷲 文 深 皿	有田(古九谷様式)		江戸前期	高 8.2 径29.8
50		色 絵 山 水 花 鳥 文 大 皿	有田(古九谷様式)		江戸前期	高 7.4 径38.8
51		色 絵 扇 面 文 大 皿	有田(古九谷様式)		江戸前期	高 7.4 径35.5
52		色 絵 桜 文 徳 利	有田(古九谷様式)		江戸前期	高22.0 胴径10.6
53		色 絵 亀 甲 花 詰 文 角 徳 利	有田(伊万里)		江戸中期	高19.3×10.9×9.2
54		色 絵 松 竹 梅 文 大 壺	有田(伊万里)		江戸前期	高43.7 胴径35.4
55		色 絵 更 紗 文 盃	有田(鍋島)		江戸中期	高 6.8 径 6.2
56		色 絵 更 紗 文 皿	有田(鍋島)		江戸中期	高 3.9 径15.0
57		色 絵 紐 文 皿	有田(鍋島)		江戸中期	高 5.8 径20.0
58		色 絵 花 文 皿	有田(柿右衛門)		江戸中期	高 3.5 径19.0
59		色 絵 菊 花 文 八 角 瓶	有田(柿右衛門)		江戸中期	高27.0 胴径16.0
60		色 絵 牡 丹 鳳 凰 文 角 鉢 子	有田(柿右衛門)		江戸中期	高16.0 全長19.0
61		色 絵 草 花 文 高 足 盃	有田(柿右衛門)		江戸中期	高13.0 径 8.0
62		色 絵 花 籠 文 八 角 小 鉢	有田(柿右衛門)	「元禄八乙亥 柿」銘	江戸中期	高 5.5 径12.5
63		色 絵 ローマ 字 入 把手 瓶	有田(伊万里)		江戸中期	高18.1 径 9.9
64		色 絵 牡 丹 文 細 口 瓶	有田(伊万里)		江戸中期	高23.0 幅11.2
65		色 絵 花 鳥 文 長 皿	有田(伊万里)		江戸中期	高2.5×32.0×11.3
66		染付オランダ語入醬油瓶	長崎(波佐見)		江戸後期	高19.3 胴径9.3
67		染付オランダ語入醬油瓶	長崎(波佐見)		江戸後期	高17.7 胴径9.5
68		染 付 山 水 文 扇 形 皿	長崎(亀山)	5 点	江戸後期	(各)高2.4 幅21.4
69		染 付 山 水 文 八 角 鉢	長崎(亀山)	6 点	江戸後期	(各)高3.7 幅14.7

近世のやきもの③

色絵陶器の誕生と展開

70		色 絵 お し ど り 香 合	京都	野々村仁清作	江戸前期	高 5.1 全長 6.5
71		色 絵 枇 杷 文 角 鉢 子	京都(御菩薩)	底裏に「御菩薩」の印あり	江戸中期	高10.8 全長16.1
72		色 絵 松 梅 文 徳 利	京都(清水)		江戸前期	高25.0 胴径12.3
73		錆地色絵梅椿文瓢形徳利	京都(清水)		江戸中期	高17.6 径11.9
74		赤 絵 龍 文 柏 葉 形 筆 洗	京都	奥田颯川(宝暦3 年～文化8 年)作	江戸後期	高 8.3 全長23.8
75		赤 絵 龍 文 盃	京都	青木木米(明和4 年～天保4 年)作	江戸後期	高 3.2 径 5.3
76		黒 地 色 絵 瓜 桃 文 鉢	金沢(春日山)	青木木米作「金城精製」銘 文化4～5 年の制作	江戸後期	高10.8 径24.0
77		染 付 結 文 形 根 付	大津(湖南)	永楽保全(寛政7 年～嘉永7 年)作	江戸後期	高 1.5 幅 4.7
78		色 絵 扇 面 文 六 角 鉢	讃岐(理平)		江戸中期	高 6.0 径31.2
79		色 絵 鳥 文 鉢	淡路	賀集珉平(寛政8 年～明治4 年)作	江戸後期	高 8.8 径19.8
80		紫地法花寿字入花瓶	紀州(偕楽園)		江戸末期	高22.5 胴径14.7
81		色 絵 金 彩 菊 草 花 文 茶 碗	薩摩		江戸後期	高 7.0 径11.2
82		赤 楽 宝 珠 文 茶 碗	赤膚	青木木兎(安永7 年～安政6 年)作	江戸末期	高 8.6 口径10.9
83		黒 楽 茶 碗	赤膚	奥田木白(寛政12 年～明治4 年)作	江戸末期一明治初期	高 8.1 口径10.4
84		金地加彩菊文菓子鉢	赤膚	奥田木白作	江戸末期一明治初期	高13.8 胴径14.5

番号	指定	名 称	窯	摘 要	国・時代	法 量 (cm)
85		三 彩 水 注			中国・唐	高 6.2 胴径5.5
86		粉 青 盃		粉引手	朝鮮・朝鮮	高 2.5 径 6.6
87		粉 青 鉄 絵 葉 文 水 注		三島手	朝鮮・朝鮮	高 7.5 長10.5
88		五 彩 兎 鶴 文 皿	景德鎮窯	祥瑞手	中国・明末期	高 3.5 径20.0
89		赤 絵 龍 文 盃			中国・明	高 4.4 径 6.3
90		青 花 桔 梗 形 香 合	景德鎮窯	古染付手	中国・明末期	高 4.5 径 4.6

表紙 /No.25 志野柳文鉢

展 観 内 容

日本のやきものの歴史は世界的に見ても古く、一万年以上遡ると言われる縄文土器より始まります。土器の時代が長らく続いた後、中国大陆や朝鮮半島から技術が伝わり、古墳時代にはろくろ成形し還元焼成する須恵器が、奈良時代には人工的に釉薬をかける施釉陶が登場します。中世に入ると、六古窯をはじめ、日本各地でやきものが焼かれるようになります。中国のやきものを理想とした優美な施釉陶も作り続けられますが、素朴で力強い焼締陶が多くを占めています。

日本のやきものの歴史に大きな展開を加えたのが、茶の湯の隆盛です。特に桃山時代には茶陶が盛んに作られ、歪んだ器形や斬新な文様など、新たなやきものの魅力が引き出されました。さらに江戸時代には、高温で硬く焼成され、透明感のある白色を呈した磁器の生産が可能になるとともに、磁器や陶器に美しい絵付けを施す技術が発展します。その技術は各地へ伝播し、日本のやきものはますます幅広い魅力を誇ることとなります。新しい技術の刺激を受けつつ、時代の美意識や用途を反映して豊かに展開してきた日本のやきものの多彩な美しさをお楽しみください。

列 品 解 説 毎週土曜日・14時（当館学芸部による）

特 別 講 演 7月19日（日）14時・講堂
「桃山の茶陶―茶碗を楽しむ―」 京都国立博物館副館長 伊藤嘉章氏

日曜美術講座 8月2日（日）14時・講堂
「京焼の魅力―江戸時代後期の作品を中心に―」 当館学芸員 宮崎もも
（ともに参加無料、ただし入館券が必要）

大和文華館 ☎631-0034 奈良市学園南1-11-6・近鉄奈良線＜学園前駅＞下車 TEL (0742)45-0544
FAX (0742)49-2929

豊かなる日本のやきもの ―縄文から江戸まで―



2015年7月3日（金）～8月16日（日）

大 和 文 華 館